

# 元稹の「酔」の詩について

前川 幸雄\*

(平成十年十月二十八日受理)

## 要 旨

『唐詩類苑』の「酔」と「酒」の詩を研究した結果、次のことが明らかになった。

一、「酔」の詩は、即興的に、あるいは交際の道具として作られている。①「酔」の詩は、彼が「現実とは違った楽しい夢の世界」へ転入する手段として作られた。②「酔」という主題は、日常的である。また、表現は平淡で、日記風であり散文的である。③「○酔」の形の詩十二首が出来てから後に、「連作」としたのであろうと推測できる。④「酔」の詩は、「ひどく乱れた様子」は詠っていない。これは、元稹の精神的抑制が効いているためであると考えられる。

二、「酒」の詩は、伝統的な「樂府題」や彼の主張のために作られているものがある。①「酒」の詩に元稹の人生観、哲学が出ている。

## KEY WORDS

【唐詩類苑】

Tang Shi Lei Yuan

【酔】

【酒】

"Alcohol"

自己規制

"Being Tipsy"

Self-restraint

## 序 言

中国人の酒に対する態度でよく知られているものは、孔子の「酒は量なし、乱に及ばず。」(『論語』郷党篇)であろう。飲む時に決めている量はないが、乱れることは無かった、というのである。そして、これは中国人の飲酒の基本的態度である。少なくともインテリの理想になっているようである。

これに意識的に違反するものは、「任誕」である。例えば、孔融などは、儒家が言う出世するとか、学問で名をなすことなどは無視して、愉快に酒が飲めればよいと放言している。また、竹林の七賢の阮籍や劉伶などは社会の常識や慣習的な規則に反発する気持ちを表現する為に、徹底的に酒を飲み、酔っぱらうといった行為をしている。しかし、彼らは生活は任誕であったが、それを文学作品に表していない。

酒の詩を多く残したことで有名な陶淵明も、酒の詩の中で「乱に及んだ」ことは歌っていない。

度をはずして、酒を飲み、それをそのまま詩の世界に取り入れたのは、ほぼ唐代からのものである。

ただし、初唐の酒と詩は、二つに分けて見る必要がある。宴席の詩は程良いところで止まっている。もう一つは、例えば、王績のような隠者は、酔っぱらうこと、つまり「酔郷」を求めて、自由の世界に憧れ酒を飲んだと見られる。

盛唐に入ると隠者の世界をそのまま生活に持ち込んで歌う詩人が現れる。李白である。彼は、豪快に飲み、その世界を詩に表したのである。一方の雄の杜甫は悲痛の世界を詠じた。苦酒、自棄酒の世界を題材として取り上げ、それに正面から取り組んだのである。

下って中唐の韓愈は無礼講の宴会での衆客の酔態を描写して、人生こんな楽しい酒宴はめったに無いといっている。乱痴気騒ぎを描写しているのである。また、白居易は、自分で酒に抑制を利かせた感じがある。

以上は、前野直彬氏の「中国の詩人と酒」(注1)の説の要約である。中国の酒の詩の概略史として分かりやすいので紹介した。さて、元稹の詩はどうであるのか、それを研究してみたいと考えるのである。

因みに、唐詩の収録率が高い明代の張之象が編纂した『唐詩類苑』(注2)を見てみよう。その第八十六卷、人部の「酔」の部には三十四人の、「酔」を詠った作品百二十三篇が収められている。その状況は氏名の初出順に記すと以下のようになっている。(一)内は合計した作品数である。一首のみの作家は作品数を示さないで氏名だけを記す。)

李白(7)、元稹(18)、白居易(42)、韓愈(3)、張為、張説、岑参(2)、王績、孟浩然、司空図、韋応物、盧仝、裴翛然、朱彬、杜牧(7)、馬異、許渾、李商隠(3)、丁仙芝、杜甫(4)、元結、許宣平、李涉、温庭筠、独孤及、盧綸、許碯、陸龜蒙(5)、皮日休(6)、李穀、張賁(3)、韓偓、劉駕、于鵠。

右の中、二首以上収められている詩人は、多い順に上げると、白居易(42)、元稹(18)、李白(7)、杜牧(7)、皮日休(6)、陸龜蒙(5)、杜甫(4)、韓愈(3)、李商隠(3)、張賁(3)、岑参(2)である。右の通り、白居易、元稹が他を圧倒している。そして、詩篇の題目を一覧して気づくことは、元稹に「○酔」の形の二字の題名の作品が十二首並んでいることである。そこで、この元稹の一連の作品を研究してみようと思うのである。

## 一 研究方法と目的

中唐の政治家であり詩人であった元稹は、代宗の大暦十四年(七九九)に生まれ、文宗の太和五年(八三三)五十三歳で没した。彼の詩文集『元氏長慶集』(注3)巻十六には先の『唐詩類苑』にも収められた詩「酔」を詠った十二首の作品がある。そして、これは配列順が、そのまま年代順になっている。

そこで、この十二首を順番に取り上げる。

また、『唐詩類苑』に収める十二首以外の「酔」を詠った六首の作品、及び『唐詩類苑』一百八十六卷、服食部「酒」に収める八首の作品を研究する。

そして、元稹の「酔」を通じて示されるその時々的心情、作品の表現上の特徴、更に、十二首は「連作」であるのかどうか、等

を追求する。また、「酔」と「酒」との詩の質的な違いについても明らかにすることを目的とする。

なお、作品の、表題・篇名、作品番号、制作年、地位、原詩、その書き下し文、脚韻を示す。(注4) (二字の篇名の次の語句は題注である。)また、作者・元稹の置かれている状況を考慮にいれながら、作品の大意についても述べる。

## 二 十二首の「酔」の作品

(一) 永貞元年(八〇五)の制作

貞元二十一年正月二十三日、徳宗崩す。正月二十六日、順宗即位す。八月四日、順宗禪位す。五日、改元。九日、憲宗即位す。

これより先、貞元十九年(八〇三) 元稹二十五歳春、校書郎を授けられる。そして、元稹はこの年・永貞元年、二十七歳の春の暮れ洛陽にいた。次の①②③は洛陽での作であろう。

① 先酔 0418 先に酔ふ

今日樽前敗飲名 今日樽前に飲名に敗れ、

三杯未だ尽くさざるに傾くこと能はず。

怪来花下長先酔 怪しみたり花の下にて長く先づ酔ひ、

半は春風蕩酒情 半ばは是れ春風蕩酒の情なるを。

(脚韻) 名、傾、情は下平十四清である。

先に酔う

今日は酒樽の前で飲酒家という名前に敗れ、

まだ三杯も飲み干さないのに杯を傾けることが出来なくなった。

怪しいことに花の下で長々と名前より先に酔って、

半分は春風に酔っているような気分である。

② 独酔 0419 独り酔ふ

一樹芳菲也当春 一樹の芳菲また春に当たり、

漫隨車馬擁行塵 漫ろに車馬に随ひ行塵を擁す。

桃花解笑鶯能語 桃花は解笑し鶯は能く語り、

自酔自眠那籍人 自ら酔ひ自ら眠るは那籍の人ぞ。

(脚韻) 春、塵、人は上平十七真・十八諄(同用)である。

独り酔う

一本の樹の花も今や春に出会って(咲いて)いる、

自由に馬車に乗って行けば舞い上がる埃が立ちこめる。

桃の花は嘲り笑い鶯はよくさえずり、

自分から酔って眠っているのは何処の人であろうか。

③ 宿酔 0420 宿酔

風引春心不自由 風は春の心を引くも自由ならず、

等閑衝席飲多籌 等閑にして席に衝き多籌を飲む。

朝来始向花前覚 朝来たりて始めて花の前にて覚め、

度却醒時一夜愁 度却す醒むる時の一夜の愁。

(脚韻) 由、籌、愁は下平十八尤である。

宿酔(二日酔い)

風は春の心を引き出したが私の心は自由ではない。

訳もなく座席に向き合って何杯も飲んだ。

朝が来て始めて花の前で醒めると、

醒めた時には昨夜の憂鬱な思いは消えてしまった。

三首とも、校書郎という比較的自由ではあるが、しかし役人としての地位がまだ本格的でない立場での春の遊びの雰囲気が出ている。

①②③とも元稹らしい若者が酒に酔っているが、春にも酔っている様子を詠っている。

(二) 永貞元年(元和四年(八〇五―八〇九)の制作

憲宗皇帝、正月二日に改元。元稹は、元和元年(八〇六)二十八歳、正月頃校書郎を止め、華陽觀に退居し、白居易と共に制舉の準備をしていた。その甲斐あって、四月十三日、才識兼茂明於体用科に第三等で合格し、二十八日には左拾遺を授けられた。ところが、時政への批判が執政者の疑忌を買ひ、九月十日河南尉に貶せられる。九月十八日、母鄭氏が没した。元稹は、官を止めて喪に服する。元和四年二月、服喪が終わり、監察御史に除せらる。三月、東蜀に使いす。五月、長安に帰り、東台に分務す。七月九日、妻韋氏没す。十月十三日、咸陽に葬る。傷悼詩を作る。九月、盧貞の妻没す。

④⑦は、この間の制作で、主に元和四年の作であろう。

④ 懼酔 答盧子蒙 0421

酔ひを懼る 盧子蒙に答ふ

聞道秋來怯夜寒 聞くならく秋來たりて夜寒に怯へ、  
不辭泥水為杯盤 泥水を辭せず杯盤をなす。  
殷勤懼酔有深意 殷勤に酔ひを懼るるには深き意有り、  
愁到醒時灯火闌 愁ひは醒むる時に到り灯火闌なり。

(脚韻) 寒、盤、闌は上平二十五寒二十六桓(同用)である。

酔いを恐れる 盧子蒙に答える

聞くところによると秋が来たから夜の寒さを恐れて、泥水を厭わずに(出かけて買い求めて)酒を飲むと。熱心に勤めて酔いを恐れるには深い意味がある、愁の思ひは酒が醒めて灯火が盛んに燃えている時にやってくる。

元稹は七月に妻を失っている。この作品は盧子蒙が寄せた作品に元稹が答えたものである。盧の飲酒を元が戒めているのである。

なお、第一句に「夜寒」の句があるが、元稹に「初寒夜寄盧子

蒙」(0225)の作がある。これは妻を失って悲しむ盧を元稹が慰めている傷悼詩である。なお、元和四年作の盧子蒙に関する元稹の詩は、他に二首ある。「城外回謝子蒙見諭」(0226)「諭子蒙」(0227)である。いずれも傷悼詩である。前者は元稹が妻を失い慰めてくれたことに關して子蒙に感謝するもの、後者は子蒙が妻を失い深く悲しむことを、元稹が戒める作品である。

なお、酒と關係はないが、元稹に、元和十五年までに作った作品に「盧十九子蒙吟盧七員外洛川懷古韻命余和」(1025元稹集外集卷第七続補一)がある。また、白居易に、会昌元年(八四一、元稹死後十年目の年)作の「覽盧子蒙侍御旧詩多与微之唱和感今傷昔因贈子蒙題於卷後」(白氏文集卷第三十五律詩)があり、元稹と盧貞を回想している。

⑤ 羨酔 0422 酔ひを羨む

綺陌高樓競酔眠 綺陌高樓は酔眠に競い、  
共期顚顚不相憐 (1) 共に期して顚顚するも相憐れまず。  
也應自有尋春日 また応に自ら春を尋ぬる日あるべし、  
虚度而今正少年 虚しく度り而今は正に少年なり。

(1) 期・疑当作「欺」。

(脚韻) 眠、憐、年は下平一先である。

酔いを羨ましく思う

きれいな街路や御殿では先を争って酔って眠っている、共に期するところがあつて疲れ切るが互いに同情はしない。また自然と春を尋ねる日もあるに違いない、空しく過ぎる今は私は正に青年であるからだ。

⑥ 憶酔 0423 酔ひを憶ふ

自歎旅人行意速 自ら嘆く旅人の行意は速くして、  
每嫌杯酒緩帰期 毎に嫌ふ杯酒は帰期を緩かならしむるを。

今朝偏遇醒時別（1）今朝は偏に遇ふ醒めし時の別れに、  
涙落風前憶醉時 涙は風前に落ち酔ひし時を憶ふ。

（1）遇・原作「偶」、拠『全唐詩』卷四二一改。

（脚韻）期、時は上平七之である。

酔っている事を憶う

自分でも嘆かわしいのは旅人は先を急ぐ気持が強くなり、  
いつも嫌うことは酒は帰る時期を遅くすることである。

今朝は意外にも酔いが醒めたときの別れに出会った、  
涙は風の前に落ちてあの酔った時を思う。

⑦ 病酔 戲作呉吟、贈盧十九經濟、張三十四弘、辛丈丘

度。 0424

酔ひを病む 戲れに呉吟を作り、盧十九經濟、張三

十四弘、辛丈丘度に贈る。

酔伴見儂因酒病（1）酔伴 儂の酒に因りて病むを見て、  
道儂無酒不相親 儂に道ふ酒無くんば相親はずと。

那知下葉還沾底 那んぞ知らん下葉してまた底を沾ることを、

人去人來剩一厄 人去り人來たりて一厄を剩す。

（1）酒病・『全唐詩』卷四二一作「病酒」。

（脚韻）窺、厄は上平五支である。

酔いを病む 戲れに呉調の詩を作って、盧經濟、張弘、

辛丘度に贈った。

飲み友達私が酒で病氣になったのを見て、

私に酒がなければ窺わないと（冗談を）いう。

どうして知ろうか薬を飲んでまた（酒が）底をついたのを、

人が出かけ人がやって来て一つの杯（少しの酒）が残っている。

ここに見える盧十九經濟は盧貞とは別人である。

④は妻を失った時の作、⑤は第二句を見ると、服喪の時期の作、

⑥も同時期の作、⑦も同時期の作であろう。

そして、酔っている時は良いが醒めると寂しさが湧いてくると  
か、わびしいとか、また、病氣でも飲むとかいうもので、作品に  
似通った自由気ままな雰囲気がある。

（三）元和五（八一〇）年の制作

この年、元稹三十二歳。彼の運命は急変する。二月十八日、河  
南尹房式の不法を暴く。元稹は長安に召し帰される。數水駅で内  
官と争う。三月、江陵士曹參軍に貶せられる。以後元和十年（八  
一五）までの數年を江陵で過ごす。以下の五首は元和五年の制作  
である。

⑧ 擬酔 与盧子蒙飲於賈晦之、醉後賦詩共十九首、子蒙

叙為別卷。自此至「狂醉」皆是夕所賦。

酔ひに擬す 盧子蒙と賈晦之に飲む、醉後詩を賦し

十九首を共にし、子蒙叙して別卷と  
為す。此より「狂醉」に至るは皆是  
の夕に賦せし所なり。 0425

九月閑宵初向火 九月の閑宵初めて火に向かい、

一樽清酒始行杯 一樽の清酒始めて杯を行う。

憐君城外遙相憶 憐れむ君の城外に遙かに相憶ひ、

冒雨衝泥黑地來 雨を冒し泥を衝きて黒地より來たるを。

（脚韻）杯、灰は上平十五灰・十六咍である。

酔ひに擬える 盧子蒙と賈晦之のところで飲む、酔った後

詩を作り十九首になった、子蒙が序文を書いて別卷とした。

この作品から、「狂醉」まで（の五首）は皆この日の夜作つ  
たものである。

九月の暇なある夜初めて焚火を前にして、

一つの樽の酒を飲み始めた。

可愛いと思う、君は郊外遙かに離れ我々を思つて、  
雨を押し泥道を踏んで暗い中をやって来たことを。

⑨ 勸酔 0426 酔ひを勧む

賓家は能く醸す愁ひを鎖す酒を、  
但是愁人便与鎖 但だ是れ愁人便ち与に鎖す。

顧我共君俱寂寞(1) 顧(ただ) 我れ君と共に寂寞を俱にして、  
只応連夜復連朝 只応ず連夜また連朝。

(1) 顧・原作「願」 挾張校宋本改。

(脚韻) 鎖、朝は下平四宵である。

酔うことを勧める

賓家では心配ごとを晴らす酒を上手に作るが、  
しかしこれは心配性の人が(愁いを)消せるのである。

ただ私は君と寂しさを一緒にして、

ひたすら連日連夜酒を飲むしかない。

第三句の君は賓晦之であろう。

⑩ 任酔 0427 酔ひに任す

本怕酒醒渾不飲 本より酒の醒むるを怕れて渾て飲まず、  
因君相勸覚情来 君の相勧むるに因りて情を覚え来たる。

殷勤満酌従聴醉 殷勤に酌に満たし酔ひを聴くに従つて、  
乍可欲醒還一杯 乍ち醒めんと欲するよりはまた一杯なるべし。

(脚韻) 来、杯は上平十五灰・十六咍である。

酔いに任せる

本来酔いの醒めるのを恐れて全く飲まない、  
君が勧めるので飲む気になった。

丁寧な酒を杯に一杯にし酔つて来るに従つて、  
にわかに醒めようとするよりはもう一杯飲む方がよいと思う。

⑪ 同酔 呂子元、庾及之、杜婦和同隱客泛韋氏池。

同じく酔ふ。 呂子元、庾及之、杜婦和隱客と同じく

韋氏の池に泛かぶ。 0428

柏樹台中推事人 柏樹台の中の推事の人、

杏花壇上鍊形真(1) 杏花壇上形を鍊ること真なり。

心源一種閑如水 心源一種にして閑なること水のごとく、

同醉桜桃林下春 同じく酔ふ桜桃林下の春。

(1) 形真・原作「真形」、挾錢校、『全唐詩』卷四一一改。

「真」与下聯「春」、均協真韻。

(脚韻) 人、真、春は上平十七真・十八諄(同用)である。

同じに酔う 呂子元、庾及之、杜婦和と共に韋氏の池

で舟遊びをした。

柏樹台(御史台)の中で仕事をする人、

杏花壇で形をととのえるのに真剣である。

心はみな一つであつて淡々としている様は水のように、

皆同じように春の桜や桃の林の中で酔っている。

(1) 形真・原「真形」に作る。錢校、『全唐詩』卷四一一に

挾つて改む。「真」は下聯の「春」と、均しく真韻に協ぶ。

庾及之については「聴庾及之彈烏夜啼引」(0236)に見える。

また、韋氏の池に遊んだことは、「韋氏館与周隱客杜婦和泛舟」(0

108)「劉氏館集隱客婦和子元及之子蒙晦之」(0109)に見

える。

⑫ 狂酔 0429 狂酔す

一自柏台為御史 柏台より御史となり、

二年辜負兩京春 二年に兩京の春を辜負す。

峴亭今日頗狂酔 峴亭にて今日頗狂して酔い、

舞引紅娘乱打人 舞ひて紅娘を引き乱打する人。

（脚韻）春、人は上平十七真・十八諄（同用）である。

狂い酔い

柏台の初めから監察御史となり、

二年で長安と洛陽の春を無駄にってしまった。

峴亭で今日は気が狂ったみたいに酔っぱらい、

立って舞い美人を引き寄せ手を乱打している人。

峴亭は湖北省襄陽の南にある山、峴山（峴首山ともいう）にある亭か？ 峴山は襄陽の町を見下ろす形勝の地にある。

⑧は某君が雨をものともせずやって来たこと、⑨は酒で愁いを消していること、⑩は醒めるのを恐れて飲むという。三篇とも憂鬱な思いがある。⑪は舟遊びの、⑫は今日までの自分を思い出し、酒に興じている。この一群の作品は、貶謫の地での侘びしきが出ている。

ここで十二首の印象をまとめる。

主題が日常的である。寂しい、侘びしいといった日常的感覺が詠われている。表現が自然であると言える。

### 三 その他の「酔」の作品

元稹の詩集の中で、上述の作品のように、まとまった状態では収められていないが、酔いを詠う作品がある。

『唐詩類苑』に収められているのは、元稹の作品番号で言えば、0117、0357、0335、0332、0222、0478、の六作品である。この六首を検討することとする。

次にあげる一首は、元和四年（八〇九）、元稹三十一歳、監察御史の時の制作である。

ア 酔醒 0222 酔ひ醒め

積善坊中前度飲 積善坊中 前度飲みしときに、

謝家諸婢笑扶行 謝家の諸婢笑ひて扶けて行く。

今宵還似當時醉 今宵還た当時の酔ひに似たるも、

半夜覺來聞哭聲 半夜覺め来たれば哭声を聞く。

（脚韻）行、声は下平十二庚・十四清（同用）である。

妻が居た時は酔っぱらって帰っても、下女が笑いながら扶けて（寢床へ）連れて行ってくれた。妻亡き後は酔いが醒めて来ると妻の死を悲しむ（下女らの）泣き声が聞こえるという、侘びしさ悲しさを詠っている。

元稹集の第九卷、傷悼詩にある。

次にあげる二首は元和五年（八一〇）、元稹三十二歳の制作。

イ 酬樂天勸醉 0117

樂天の酔ひを勧むるに酬ゆ

神麴清濁酒 神麴清濁の酒、

牡丹深淺花 牡丹深淺の花。

少年欲相飲 少年相飲まんと欲す、

此樂何可涯 此の樂しみ何ぞ涯（かぎ）るべきや？

沈機造神境 沈機神境を造り、

不必悟楞伽 必ずしも楞伽を悟らず。

酡顏返童貌 酡顏は童貌に返る、

安用成丹砂？ 安んぞ丹砂を成すを用ひんや？

劉伶称酒德 劉伶は酒德を称するも、

所称良未多 称する所は良もすれば未だ多からず。

願君聽此曲 願はくは君此の曲を聴け、

我為尽称嗟 我為に嗟きを称するを尽くさん。

一杯顔色好 一杯にて顔色好く、

十盞膽氣加 十盞にて膽氣加わる。

半酣得自恣 半酣すれば自ら恣にするを得、

酩酊煖太和 酩酊すれば太和に煖す。

共醉真可樂 共に酔ふは真に樂しむべく、

飛觥撩乱歌 飛觥して撩乱して歌ふ。

独醉亦有趣 独り酔ふも亦趣有り、

兀然無与他 兀然として他に与る無し。

美人醉燈下 美人灯下に酔ひ、

左右流横波 左右に横波を流す。

王孫醉牀上 王孫は牀上に酔ひ、

顛倒眠綺羅 顛倒して綺羅に眠る。

君今勸我醉 君今我に酔ふを勧む、

勸醉意如何？ 酔ひを勧むる意如何？

(脚韻) 花、加、砂、多、嗟、和、歌、他、波、羅、何は下平

七歌・八戈・九麻(古韻通)で、一韻到底格である。

酒の効用を述べて、徹底的に飲もう、酔いは最高であると言う。

「酔い」を肯定している。

なおこれは白居易の「勸酒寄元九」(白詩の作品番号0416)

の和篇である。

ウ 仁風李著作園醉後寄李十(1) 0478

仁風の李著作の園にて酔ひし後李十に寄す

朧明春月照花枝 朧明の春月は花の枝を照らし、

花下音声是管兒(2) 花下の音声は是れ管兒。

却笑西京李員外 却って笑ふ西京の李員外、

五更騎馬趁朝時 五更の騎馬の朝に趁く時。

(脚韻) 枝、児、時は上平五支・七之(同用)である。

(1) 李十・撰『唐人行第録』考、是「李十一」之尊文、詩

有云「却笑西京李員外」、而隔一篇乃称「杓直以員外郎判塩鉄」也。

(2) 音：錢校宋本、『全唐詩』卷四二二注、「一作驚。」是、錢校、『全唐詩』注、「一作似。」

友人の所で、朝方出勤の時まで夜通し飲んだことをいつている。

仁風は洛陽の仁風里であろう。

右の(1)によれば、李十は李十一杓直のことである。

次にあげる一首は、元和五年(八一〇)〜八一四、元稹三十

二歳〜三十六歳、江陵士曹參軍の時の制作。

エ 酬李六醉後見寄口号 用本韻 0332

李六の酔後に寄せらるに酬ゆる口号 本韻を用ふ

頓愈頭風疾 頓に愈ゆ頭風の疾、

因吟「口号」詩 因って吟ず「口号」の詩。

文章紛似繡 文章は紛として繡に似て、

珠玉布如棋 珠玉は布きて棋の如し。

健羨觥飛酒 健は羨む觥酒を飛ばすを、

蒼黃日映籬 蒼は黄ばむ日の籬に映するを。

命童寒食倦 童に命ず寒き食に倦き、

撫稚晚啼飢 稚を撫ず晩に飢えに啼くを。

潦倒慙相識 潦倒して相識に慙じ、

平生頗自奇 平生頗る自ら奇とす。

明公將有問 明公將に問ふこと有らんとす、

林下是靈龜(1) 林下は是れ靈龜なるかと。

(1) 林・疑当作「牀」。

(脚韻) 詩、棋、籬、飢、奇、龜は上平五支・六脂・七之・八

微(古韻通)で、一韻到底格である。

元稹は、妻を失ってから侘びしい限りの生活ですと言って、酒



の樂しさはないことを述べている。

李六は李景侯である。

次にあげる一首は、元和六年（八一）～九一年（八一四）、元稹十三歳～三十六歳、江陵士曹參軍の時の制作。

オ 誚盧戡与予数約遊三寺戡独沈醉而不行 0335

誚盧戡と予と数しば約して三寺に遊ぶ、戡独り沈酔して行かず。

乘興無羈束（一）興に乗るに羈束無く、閑行信馬蹄 閑かに行くに馬蹄に信ず。

路幽穿竹遠 路は幽かにして竹を穿ちて遠く、

野迴望雲低 野は迴かにして雲を望むに低し。

素帯茅花乱 素き帯茅の花は乱れ、

円珠稻実斉 円き球稻の実は斉し。

如何盧進士 如何せん盧進士、

空恋醉如泥 空しく恋ふも酔ふこと泥の如し。

（一）羈・盧校宋本作「拘」。

（脚韻）蹄、低、斉、泥は上平十二斉である。

我々も酔っていたが、素晴らしい風景であった。独り戡が泥酔して来れなかったのは残念であった、という。

元稹集卷第十四律詩にある。

次にあげる一首は、元和十年～十三年（八一五～八一八）元稹三十七歳～四十歳、通州司馬の頃の制作。

カ 醉行 0357 酔ひて行く

秋風方索漠 秋風方に索漠として、

霜貌足睽携（一）霜の貌睽携に足る。

今日騎驄馬 今日驄馬に騎り、

街中醉踏泥 街中に酔ひて泥を踏む。

（一）睽・『全唐詩』卷四一〇作「睽」。

（脚韻）携、泥は上平十二斉である。

あし毛の馬に乗りさつそうと出かけたが、酔っていて泥を踏んだ、という。

元稹集卷第十五、律詩にある。

ここで取り上げたアイウエオカの六篇の詩のうち、アは傷悼詩でやや暗い。エも酬和だが暗い。イ、ウ、オ、カ、の作品は明るい。そして、極めて表現が自然である。従って、この『唐詩類苑』の六篇は、前掲の十二篇の作品と比べてみても、酔いの姿を自然に詠う詠い方において大差がないと思う。

これらの六篇の作品は元稹の境遇や交友関係を示しており、彼の日常生活の自然な姿勢を反映している。この点も前掲の十二篇と似ている。

#### 四「唐詩類苑」の「酒」の詩

『唐詩類苑』第一百八十六卷、服食部「酒」の項目には、元稹の作品が八首収められている。これらの作品を一瞥して「酔」の作品と比較し、どういう違いがあるかを研究してみたい。作品は、制作年代順に検討することとする。

次の作品は、元和四年の監察御史の頃の制作である。

A 夜飲 0325 夜飲む

灯火隔簾明 灯火は簾を隔てて明かに、

竹梢風雨声 竹の梢に風雨の声。

詩篇随意贈 詩篇は意に随って贈り、

杯酒越巡行 杯酒は巡を越えて行く。

漫唱江朝曲 漫りに唱う江朝の曲、

閑微葉草名 閑かに徴す葉草の名。

莫辞終夜飲 辞する莫かれ終夜の飲、

朝起又當營 朝に起くれば又當々たらん。

(脚韻) 明、声、行、名、當は下平十二庚・十四清(同用)である。

夜を徹して飲もう、明日になればまた忙しいんだから、という。同僚と飲んだのであろうか。しかし、酒を楽しむというのではない。何か、必死な感じがある。

元稹集第十四卷、律詩にある。

次にあげる二つの作品は、元和六・九年の江陵士曹参軍の時の制作である。

# B 飲致用神麴酒三十韻 0296

飲みて神麴を用ひし酒に致す三十韻

1 七月調神麴 七月神麴を調え、

2 三春釀綠醕 三春綠醕を醸す。

3 彫鐫荆玉盞 荆玉を彫鐫せし盞、

4 烘透内丘瓶 内丘を烘透せし瓶。

5 試滴盤心露 試みに盤心に露を滴せば、

6 疑添案上螢 疑ふらくは案上に螢を添へしかと。

7 滿尊凝止水 尊を満たせば止水凝り、

8 祝地落繁星 地を祝へば繁星を落とす(がごとし)。

9 翻陋瓊漿濁 翻陋せば瓊漿濁り、

10 唯聞石髓馨 唯だ聞くのみ石髓の馨るを。

11 冰壺通角簾 冰壺は角簾に通る、

12 金鏡徹雲屏 金鏡は雲屏に徹る。

13 雪映烟光薄 雪は烟光の薄きを映じ、

14 霜涵霽色冷 霜は霽色の冷たきを涵ふ。

15 蚌珠懸皎皛 蚌珠は皎皛に懸かり、

16 桂魄倒瀾溟 桂魄は瀾溟に倒(さかさま)なり。

17 昼灑蟬將飲 昼に灑げば蟬は將に飲まんとし、

18 宵揮鶴誤聆 宵に揮へば鶴は聆くを誤る。

19 琉璃驚太白 琉璃は太白を驚かし、

20 鍾乳訝微青 鍾乳は微青を訝からしむ。

21 詎敢辞濡首 詎ぞ敢えて濡首を辞せん、

22 并憐可鑒形 並びに憐れむ鑒る可きの形を。

23 行当遣俗累 行くに当に俗累を遣るべく、

24 便得造禪扃 便ち得たり禪扃に造るに。

25 何憚說千日 何ぞ憚らん千日を説くを、

26 甘從過百齡 甘んじて從ひて百齡を過ごさん。

27 但令長泛蟻 但だ長く蟻を泛べしむれば、

28 無復恨漂萍 復た萍を漂すを恨むこと無し。

29 膽壯還增氣 膽壯んなれば還た氣を増し、

30 機忘反自冥 機忘るれば反つて自ら冥し。

31 甕眠思畢卓 甕に眠りて畢卓を思ひ、

32 糟藉憶劉伶 糟を藉きて劉伶を憶ふ。

33 彷彿中聖日 彷彿として聖日に中り、

34 希夷來大庭 希夷として大庭に来る。

35 眼前須底物 眼前 底物を須ひ、

36 座右任他銘 座右 他銘に任す。

37 刮骨都無痛 骨を刮るに都て痛み無く、

38 如泥未擬停 泥の如く未だ停むるに擬えず。

39 殘觴猶漠漠 殘觴は猶ほ漠々として、

40 華燭已熒熒 華燭は已に熒熒たり。

41 真性臨時見 真性は臨時に見はれ、  
 42 狂歌半睡聴 狂歌は半ば睡りて聴く。  
 43 喧聞争意気 喧聞して意気を争ひ、  
 44 調笑学娉婷 調笑して娉婷を学ぶ。  
 45 酩酊焉知極 酩酊して焉んぞ極を知らん。  
 46 羈離忽暫寧 羈離して暫くの寧きを忽にす。  
 47 鷄声催欲曙 鷄声は曙ならんと欲するを催し、  
 48 蟾影照初醒 蟾影は初めて醒めしを照らす。  
 49 咽絶鵲啼竹 咽絶えし鵲は竹に啼き、  
 50 蕭撩鴈去汀 蕭撩する鴈は汀に去る。  
 51 遙城伝漏箭 遙かな城より漏箭を伝へ、  
 52 郷寺響風鈴 郷の寺は風鈴を響かす。  
 53 楚沢一為梗 楚沢一たび梗を為せば、  
 54 堯階屢變寔 堯階屢しば寔を變ず。  
 55 醉荒非独此 醉荒は此を独りにするに非ず、  
 56 愁夢幾曾經 愁夢は幾たびか曾つて経たり。  
 57 每恥窮途哭 毎に恥ず途に窮りて哭するを、  
 58 今那客淚零 いま那んぞ客の涙を零す。  
 59 感君澄醴酒 君が醴酒を澄ますに感じ、  
 60 不遣渭和涇 渭をして涇に和せしめず。  
 (脚韻) 下平十五青の隔句押韻で、一韻到底格である。  
 第一句〜二十句までは、出来た酒について、その素晴らしさを  
 修辭を凝らして表現している。第二十一句〜三十句は酒の効用を  
 説く。第三十一句〜四十句は酔っていることの効用を説く。第四  
 十一句〜五十二句は酔っている最中から酔い醒めの様子を描写す  
 る。第五十三句〜六十句は作者の現状を説いている。  
 元稹集卷第十三律詩にある。

# C 酒醒 0342 酒より醒む

飲醉日将尽 飲みて酔ひ日将に尽きんとし、  
 醒時夜已闌 醒むる時夜已に闌なり。  
 暗灯風焰曉 暗灯に風焰の曉に、  
 春席水窓寒 春席の水窓は寒し。  
 未解爇身帶 未だ解かず身に爇らす帶、  
 猶傾墜枕冠 猶傾く枕に墜ちし冠。  
 呼兒問狼藉 兒を呼びて狼藉を問ひ、  
 疑是夢中歡 疑ふは是れ夢中の歡びかと。

(脚韻) 闌、寒、冠、歡は上平二十五寒・二十六桓(同用)で  
 ある。

何処で飲んだのであろうか。酔いから醒めて着替えもせずに寝  
 ていたことに気づき、ボーイを呼んで自分が何をしたのかを聞き、  
 昨夜の歡樂は夢の中の出来事であつたように思う、というのであ  
 る。酔い醒めの空しさを詠っている。

元稹集卷第十四律詩にある。

次の作品は、元和十年の作品である。年末に長安に呼び帰され  
 て三月末に通州司馬に出されるまでの間の制作であらう。

# D 和樂天仇家酒 0558 樂天の仇家の酒に和す

病嗟酒戸年年減 病みて 酒戸の年々減るを嗟き、  
 老覺塵機漸漸深 老いて 塵機の漸漸深きを覺ゆ。  
 飲罷醒余更惆悵 飲み罷め醒めての余りに更に惆悵す、  
 不如閑事不經心 如かず 閑事の經心せざるに。

(脚韻) 深、心は下平二十一侵である。

樂天の「仇家の酒」に答える詩、である。

病を得て飲む酒の量が年々減っていくのを嘆き、老いて俗世との  
 関わりが次第に深くなっていくのを感じる。酒を飲んでも酔いが

醒めた後にはいっそう悲しみが増すから、そういう俗事は気に掛けないのに越したことはない、といっている。楽天の苦勞性によくよするなど忠告しているのである。

元稹集卷第十九律詩にある。

次の作品は、元和十二年の通州司馬の時の制作である。

E 将進酒 0667 将に酒を進めんとす

1 将進酒 将に酒を進めんとす、

2 将進酒 将に酒を進めんとす、

3 酒中有毒酖主父 酒中に主父を毒酖するもの有り、

4 言之主父傷主母 之を主父に言えば主母を傷つく。

5 母為妾地父妾天 母は妾を地と為し父は妾を天とす、

6 仰天俯地不忍言 天を仰ぎ地に俯して言ふに忍びず。

7 陽為僵躅主父前 陽りて主父の前に僵躅し、

8 主父不知加妾鞭 (1) 主父知らず妾に鞭を加ふ。

9 傍人知妾為主説 傍人妾の主の爲にするを知りて説き、

10 主将涙洗鞭頭血 主は涙を将(も)つて鞭頭の血を洗ふ。

11 推(他雷反)推主母牽下堂 (2)

主母を推推し牽きて堂より下し、

12 扶妾遣升堂上牀 妾を扶けて堂に升り牀に上らしむ。

13 将進酒 将に酒を進めんとす、

14 酒中無毒令主寿 酒中毒無くして主をして寿ならしむ。

15 願主廻恩婦主母 願はくは主は恩を廻らして主母に婦さん、

16 遣妾如此由主父 (3) 妾をして此くの如くし主父を由とせしむ。

む。

17 妾為此事人偶知 妾は此の事の爲に人偶々知り、

18 自慙不密方自悲 自ら密かにせざるを慙じ方に自ら悲しむ。

19 主今顛倒安置妾 主は今顛倒して妾を安置す、

20 貪天僭地誰不為? 天を貪り地を僭して誰か為さざる?。

(1) 妾・原作「妾」、換宋蜀本、蘭雪堂本、叢刊本、『全唐詩』卷四一八改。

(2) 推・『樂府詩集』卷十七作「摧」。

(3) 由・『樂府詩集』、『全唐詩』作「事」。

(脚韻) ①酒、酒、(父)、母は上声四十四有・四十五厚(同用)。

四句まで。②天、(言)、前、(鞭)は下平一先。八句まで。

③説、血は入声十六屑・十七薛(同用)。十句まで。④堂、

牀は上平十陽・十一唐(同用)。十二句まで。⑤酒、寿、(母)、

(父)は上声四十四有・四十五厚(同用)。十六句まで。⑥

知、悲、為は上平五支・六脂(同用)。二十句まで。六回換

韻している。換韻格である。なお、( )内の字は、許世瑛

氏は協韻であるという。(注5)

正義を貫くことによって、身分の違う妻と妾との立場を逆転させることが、社会の倫理を乱すことになるという、非常に微妙な問題を論じている。これは、酒を詠じているとは言えない作品である。

この作品は、元稹集卷二十三、樂府にある。有名な樂府題である。

次にあげる二作品は、元和十年・十三年の通州司馬の時の制作である。いずれも元稹集卷第十五律詩にある。

F 指巡胡 0358 巡胡を指す

遣悶多憑酒 悶を遣るには多く酒に憑り、

公心只仰胡 心を公にして只だ胡を仰ぐ。

挺身唯直指 身を挺して唯直指し、

無意独欺愚 意に独り愚を欺く無し。

(脚韻) 胡、愚は上平十虞・十一模(同用)である。

この作品は、巡胡をたたえているのであろう。酒を詠ってはいない。

#### G 飲新酒 0359 新酒を飲む

聞君新酒熟 聞く君が新酒熟すと、  
況値菊花秋 況んや菊花の秋に値ふをや。

莫怪平生志 怪しむ莫かれ平生の志、  
図鎖尽日愁 鎖すを図らんのみ尽日の愁いを。

#### (脚韻) 秋、愁は下平十八尤である。

菊花の秋に君の家の新酒が出来たということだ。そこで出かけて行って飲もうと思う。だからといって、日頃の私の抱負が変わったというわけではないのだ。一日中の面白くない気持ちを消したいと思うだけなんだよ、という。

次の作品は、元和十三年の通州司馬の時の制作である。

#### H 与李十一夜飲(一) 0585

##### 李十一と夜飲む

寒夜灯前頼酒壺 寒夜 灯前 酒壺に頼り、  
与君相对興猶孤 君と相对して興あるも猶ほ孤なり。

忠州刺史応閑臥 忠州刺史 閑臥すべきや、  
江水猿声睡得無? 江水の猿声睡り得たるや無(いな)や?。

(1) 冀氏はこの詩と次の詩「贈李十一」一首とは、岑仲勉の『唐人行第録』に拠って考証すると、ともに「李六」の誤りである。「李六」は李景儉である。として、以下に岑の意見を引用している。以下省略す。(テキストの二二九頁参照。)

(脚韻) 壺、孤、無は上平十虞・十一模(同用)である。

酒壺を前にして君と飲んでも寂しい、という。

元稹集卷第二十律詩にある。

A、Hの八作品は、酒の楽しさを詠うものとは言い難い。A、Gは仕事の息抜き、Bは「酒」そのものについて、C、D、Hは酔い醒めのむなしさ、侘びしさを詠っている。総じて言えば、人生の苦さを感じていることを詠っている。また、E、Fには彼の倫理観、哲学を明確に示そうとする姿勢がある。こうしてみると、「酒」の詩は、連作やその他の「醉」の作品とは違っているといえる。それが、『唐詩類苑』における「醉」と「酒」の分類の差の理由なのであろう。

## 五 結 語

元稹の「醉」と「酒」の詩作品を研究した結果、次のことが明らかになった。

第一。「醉」の詩は、酔いの勢いで即興的に、あるいは友人との交際の道具として作られているものである。日常的感情が出てくる。表現が平淡で、日記風であり散文的である。

第二。「酒」の詩は、伝統的な「樂府題」や、意見の主張の為に、意図的に作られているものがある。作者の人生観、思想が、比較的まとまった形で述べられている。

第三。十二首の連作を含む「醉」の詩について、以下に私見をまとめる。

その一。元稹にとって、十二篇の作品における「酒に酔う」とはどういうことであつたのか。それは、正気の時に経験する「現実の苦しみの世界」から、酒に酔った時に味わえる「非現実の楽しい夢の世界」・「酔郷」へ転入する手段であつたと思われる。酔いから醒めたときの寂しさや苦しみ、酔いよりも苦しいと言う

こと、酔いの世界に浸っていたいと表現をすること、から推測できるのである。

その二。主題が日常的であると言うことが出来る。これは、酔いが日常的にあることを指して言ったのである。但し、元稹のこの十二首のように酔いばかりを取り上げて連作風にしているものは見かけない。その意味では、ユニークである。

その三。表現が平淡である。これは、日記風で散文的であるということである。事柄を時間の順序に従って事実を主として描写していくということに主眼をおいているように見える。一篇の作品として一篇一篇の構成に特に力を注いだという風には感じられない。(「寂しい、侘びしい」という表現は、晩唐の詩に多くなるようである。これらの作品は、その先駆けであろう。また、日記風で散文的であることは、中唐から宋代へと連なる傾向であるように思われる。)

その四。酔いを主題にしている作品が十二首並ぶと、最初から連作を作ろうという意欲があつたように考えられそうである。しかし、十二首を検討した結果、制作の年月が五年の長期にわたっている。このことから判断して、連作制作の計画が最初からあつたとは考えにくい。むしろ、時々その思いを卒直に表現していただけであると考えられる。しかし、作品が増えてきた段階では、まとまりを意識したと思われる。そして、詩集に収める時点では、連作のように並べたとは思われるのである。ただし、それが元稹自身が意識してしたものか、後代の人によって為されたものであるのかにはわかに判断出来ない。

その五。「酔」の詩は、楽しむ、乱れない、ほどほどである、と見られる。規制が効いている言えると思う。「酔」の詩よりも「酒」の詩の方に元稹の本音が出ているように見える。

## 注 記

(注1) 前野直彬著「中国の詩人と酒」 東京大学公開講座22「酒」所収。東京大学出版会 一九九一年一月二日 十一刷。一五九―一八五頁。

(注2) 「唐詩類苑」張之象編 汲古書院 平成七年版 による。

なお、元稹の詩の「唐詩類苑」での収録実詩数eは七四三首で、「全唐詩」「全唐詩外篇」の収録詩数fは八二八首である。f分のeの収録率は、八九・七パーセントである。同書の六十頁を参照。

(注3) テキスト・「元稹集」(上冊、下冊)。冀勤点校、中国古典文学基本叢書、中華書局、一九八二年刊。

(注4) 篇名、作品番号、制作年、地位・「元稹研究」花房英樹・前川幸雄著 桑文堂書店、昭和五十二年刊、による。

「脚韻」は筆者が「広韻」によって調査したものである。

(注5) 「論元稹樂府古題十九首用韻」許世瑛著「淡江學報」第七号、一九六八年十一月刊、一―二七頁、参照。  
以上。一九九八年十月下浣、記す。

## On “Being Tipsy” Poems of Yuan Zhen

Yukio MAEGAWA\*

### ABSTRACT

As the results of my study on “Being Tipsy” and “Alcohol” poems of *Tang Shi Lei Yuan*, the following have been found:

1. “Being Tipsy” poems were written impromptu and/or as a way of friendly relations; they were written by the poet as a step to transform himself and go into “a pleasant and happy world of dream which is completely different from reality”; the theme of being tipsy was not a special one, for he was habitually drinking, and the wording is quite ordinary, not elaborate but simple, and as prosaic as if a diary; after the twelve poems on “Being Tipsy” were written, they seem to have been arranged in a form of a sequence; “Being Tipsy” poems were not made while the poet was drunken, the reason seems to be that the poet’s self-restraint had an effect on the poems.

2. Among “Alcohol” poems are some which were written in the tradition of “Yue Fu Ti” (i.e., poems written under the same title) or for the sake of expressing his ideas on various matters, and it is in these poems that Yuan Zhen’s way of life is apparent more clearly.

---

\* Division of Languages: Department of Japanese Language